

命の教育をめぐって

—幼児との活動を通じた高校生の自尊感情の変容—

Study of Life Skills Between Students in an Agricultural High School and Children in a Kindergarten:

Examining the Effects of Interactive Learning and Self-esteem

勝木 洋子*・奥田 格**・菊川 裕幸

要 旨

日常的に命を育む農業教育を専攻する高校生と都市で暮らす園児とを「自立的に生きる力を培い、創造性を伸ばす」ことに視点を置きプログラムを展開した。さらに、幼児に関わる地域農業専攻高校生の自尊感情にも視点を当て、肯定的気分測定尺度（PMS）を測定した。

PMSの結果から、すべての項目において実施前よりも実施後に高い数値を示した。特に農業実習活動を深く学んできた3年生は、幼児に教えることで肯定的な気分が向上した。全体的にみて、幼児に高校生自身の学びを教えるという体験は、肯定的な気分を向上または醸成することが可能であるということがわかった。

Abstract

This research developed based on a program which focused on cultivating independence and enhancing creativity between two groups: high school students majoring in agricultural studies who learn daily about the ways to foster lives, and children from the city.

Positive Mood Scale (PMS) was used to measure the level of self-esteem in the high school students. The results of the PMS showed higher scores for all items in post-program implementation. Particularly, in senior high school students with more experiences of agricultural education trainings, improved sense of self-affirmation was exhibited through the mentoring of the children. Overall, the research found that the experience of interactive learning in which the high school students shared their knowledge with children resulted in improving their own self-esteem.

キーワード：命をはぐくむ 農業教育 高校生と幼児 自尊感情 環境教育

Nurturing life, high school students and children, self-esteem, environmental education

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 兵庫県立篠山東雲高等学校

はじめに

体験活動の教育的意義は子どもの頃の体験が豊富なおとなほど「やる気や生きがいを持っている人が多い」、「丁寧な言葉を使うことができる」といった、日本文化としての作法・教養が高い傾向にある。また「小学校低学年までは友だちや動植物との関わり、小学校高学年から中学生までは地域や家族との関わりが大切である」と国立青少年教育振興機構が報告している。¹⁾さらに同調査では「年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきている」と述べ、幼少時の体験の希薄さが危惧されている。

「体験活動とは、生活・文化体験活動、自然体験活動、社会体験活動の3つに大きく分類され、子どもが、直接自然や人・社会などに関わる活動をおこなうことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組を広く包含している」²⁾、このような子どもに必要な体験活動の機会を奪っていることなどが調査報告では指摘されている。また、体験活動の意義・効果として、「社会を生き抜く力」の養成、規範意識や道徳心の育成、学力への好影響などを挙げている。³⁾

しかし現状では、おとなの生活の利便性が向上する反面、子どもの遊ぶ環境は自然体験が減少し、交通事故などのリスクを恐れるあまりおとなが子どもを過保護にしている現状がある。また、少子化の影響により地域に同年代の仲間が少なくなり、子どもが群れて遊ぶ経験も減少している。

そこで本研究では、日常的に命を育む農業教育を専攻する高校生（以下、「農業高校生」とする）と都市で暮らす園児とを「自立的に生きる力を培い、創造性を伸ばす」ことに視点を置きプログラムを展開した。さらに、幼児に関わる地域農業専攻高校生の自尊感情にも視点を当て、肯定的気分測定尺度（PMS）を測定した。

中・高校生が幼稚園等に行きともに遊びを体験することは多いが、農業高校生が実習している現場を幼児が見る体験は少ない。社会教育の場合、NPOや法人が異年齢、異世代交流を実施しているが、農業高校における職業生活の場で活動とともに体験することは少ない。年齢の近い高校生を活動のモデルとして幼児が見ることは、ひとつの次世代育成支援であるといえる。

1 地域と連携し、地域とともに歩む高校生

兵庫県立篠山東雲高等学校は、兵庫県篠山市の東端に位置し京都府園部市と隣接している。1学年1クラスの県内一小さな農業高校である。2011（平成23）年に兵庫県立篠山産業高等学校東雲校から独立し、平成28年度で6年目を迎えている。昨今の少子化にあって公立学校の統廃合が進む中、分校から独立したケースは希である。



肥沃な土地にあって、篠山特産の黒大豆（丹波黒）や山の芋の生産、改良、調理方法などの工夫において、地元篠山市の全面的なバックアップを受けながら「農業教育の特質を活かし、地域に貢献できる心豊かな人材の育成」をミッションとした幅広い教育活動を展開している。また、小規模校にしかできない小回りの効くさまざまなボランティア活動や現場実習などを通して、地元への貢献活動や、研究活動における各種コンテストの受賞で目を見張る成果を上げている。

例えば、2015（平成26）年は、放置竹林の整備活動と伐採竹の再生利用の研究発表で、第4回ECO-1グランプリ全国1位となる内閣総理大臣賞を獲得した。さらに、2016（平成28）年も全国農業高校生の甲子園と言われる、第67回日本学校農業クラブ全国大会でのプロジェクト発表Ⅱ類の研究発表において、最優秀賞（文部科学大臣賞）を受賞し、全国にその名を広める優秀な結果を残した。今後もその研究活動は広がりを見せるところにある。

しかし、生徒の中には、思うような中学校生活を過ごせなかった者や、時として自分勝手な振る舞いがあったり、逆に自分の殻に閉じこもりがちな生徒、また療育手帳を保有し特別な支援が必要となる生徒が13.7%在籍している（平成28年3月末現在）。このような生徒に対し、彼らの自尊感情の高揚と自己有用感の醸成が教育の根幹となっている。

兵庫県では、第2期「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」が2014（平成26）年から5年計画で進められている。その中の児童生徒が「培うべき力」のひとつに、「生命を尊び、自然を大切にし、思いやりや寛容の心をもって多様な人々と共生する態度を養う」が提唱されている。篠山東雲高校でも、建学の精神である『愛郷・愛農の志』を基幹に、関わるすべて人や自然・動植物を愛する心を育てる『命の教育』の推進が教育方針の柱となっている。

こういった中において、本研究では、特色ある篠山東雲高校の教育活動を通して、生徒一人一人の自己実現と地域の期待を担う人材育成につながる教育実践をさらに推し進めていく上で、兵庫県教育委員会より「高校生心のサポートシステム」実践・研究開発校としての指定を受け、その研究活動の一環として、「幼児とのふれあい活動を通じた高校生の自尊感情の変容と有用感」のテーマで実践研究を進めた。

2 「高校生心のサポートシステムプロジェクト」の概要

兵庫県立篠山東雲高等学校地域農業科では、動植物の飼育や栽培を通じて命の教育を実践する農業高校の特性を生かし、生徒が命の大切さを知り、良好な人間関係を構築し、いじめや自殺等の問題行動を未然に防ぐ学校づくりを推進している。

また、地域貢献活動を通じた、社会性の涵養（とりわけ農業教育を柱とする職業的社会性）をめざし、在籍する生徒が将来にわたって社会で活動できることをめざしている。その活動の一環として、命の大切さを高校生が幼児に伝え教えることで、互いに自尊感情や有用感を感じることのできるプログラムを計画し実施した。

(1) 目的

高校生の「心のサポートシステム」プロジェクトの一環として、幼児との関わりの体験から、その前後の自尊感情を測定する。

(2) 対象

兵庫県立篠山東雲高等学校地域農業科生徒 109名（1. 2. 3年生）

「心のサポートシステム」プロジェクトチーム：兵庫県立東雲高等学校 教員4名

篠山市立たき幼稚園児 5歳児 50名

津田このみ学園 5歳児 37名

(3) 場所

兵庫県篠山市福住1260 兵庫県立篠山東雲高等学校内農場

(4) 方法

高校生には平成27年10月19日に事前学習として、幼児への接し方のワークショップをおこない、さらに当日のプログラムの内容を決定した。

高校生と篠山市立たき幼稚園園児との関わりは、お互いに徒歩圏内にあるので高校生が幼稚園を訪問し、一緒に遊んだ経験が数回ある。

津田このみ学園は姫路市飾磨区にあり、私立の総合園として0歳から5歳児の保育をおこなっている都市型の子ども園である。当日は貸し切りバスを利用し姫路から篠山への移動をおこなった。

そして11月6日に高校生が計画したプログラムを実施した。4月からプロジェクトのスケジュールと校内の動きを表1に示した。



農場へ



動物とのふれあい（ラブラドル他）

表1 取り組み内容のスケジュールと校内の動き 2015（平成27）年）

月	内 容
4	「心のサポートシステム」プロジェクトチーム組織立ち上げ（校内） 行政機関と「支援を要する生徒支援会議（ケーススタディ）」 肉用牛や犬の飼育、野菜や草花の実習開始（年間） いじめ・自殺予防に関するアンケート実施（全学年・各学期）
7	職員研修（篠山市家庭児童相談員による行政の支援組織関する件）
9	行政・学校・民間との「要支援担当者会議（篠山市内関係者）」
10	プロジェクト担当者打合せと幼稚園への説明（篠山東雲高校、たき幼稚園） 牛の出荷（共進会・解体・消費） セラピー犬の幼稚園・高齢者ホーム・特別支援学校等への派遣 事前学習「ふれあい活動」の導入と役割分担と実施計画（高校生、勝木）
11	鶏の孵化（飼育・解体・調理） 行政機関と「支援を要する生徒支援会議（ケーススタディ）」 PMS 1回目測定 プログラム実施 PMS 2回目測定
12	「心のサポートシステム」プロジェクトチームによる生徒の支援取組の検証と 今後の支援方策の検討

高校生はそれぞれの類型に分かれ2年生と3年生がペアを組み、園児に解説、実技指導等をおこなった。園児は各園ごとに4つのグループに分かれ、高校生と共に4種類すべてのプログラムを体験した。なお、ひとつのプログラムの実施時間は約15分とした。

表2 実施したプログラムの内容

	内容	教材	類型	担当
1	幼児の案内	案内看板	フードプロジェクト	3年8名 2年10名
2	動物とのふれあい	イヌ（ラブラドル）	生物利用・野菜園芸	3年8名 2年8名
3	動物観察	ウシ（肉用牛）	生物利用・野菜園芸	3年8名 2年8名
4	フラワーアレンジメント	バラ、カーネーション	ふるさと特産	3年6名 2年5名
5	農産物の収穫	黒豆（枝豆）ダイコン	作物・機械	3年6名 2年6名



セラピー犬とのふれあい



はじめて見るウシの大きさに驚く



ウシの観察



フラワーアレンジメント



フラワーアレンジメント



畑の中を歩く



大根の収穫



大根の観察

3 高校生の自尊感情の変化と有用感

プログラム実施前の2015（平成27）年11月4日、実施後の同年11月6日に、高校生を対象に肯定的気分測定尺度（PMS：Positive Mood Scale）検査紙による調査と、実施後のみ記述式アンケートによる測定をおこなった。⁴⁾

PMSは、12項目の気分を表現した「リラックスした」、「愛情に満ちた」、「楽しい」、「集中した」のような言葉について当てはまるものを7段階で回答する検査紙である。

また、記述式のアンケートには子どもたちへのメッセージと感想を記入する欄を設け、そこに記入された文章をテキストマイニングによって分析した。

4 結果と考察

PMSの結果を図1、図2に示した。図1は高校生全体の平均値を実施前後で示したものである。すべての項目において、実施前よりも実施後が高い数値で推移している。特に、「愛情に満ちた」、「いとしい」、「晴れ晴れとした」の項目において、値が高くなった。

図2は、学年別の活動前後による気分の変化を示した。実施後の得点が最も高かった学年は3年生であった。1、2年は項目によってばらつきがあるものの、実施後の平均得点は同点数であった。実施前の得点は、2年生が3.3、1年生が3.4と低かった。

これらの結果から、これまでの経験や農業に深い思いを持っている3年生は、園児に教えることで肯定的な気分が向上した。一方で、経験や思いが未熟な1、2年生は実施前と実施後の気分変化の差が少なかった。しかし、全体的にみても幼児に自身の学びを教えるという体験は、肯定的な気分を向上または醸成することが可能であるということが明らかになった。

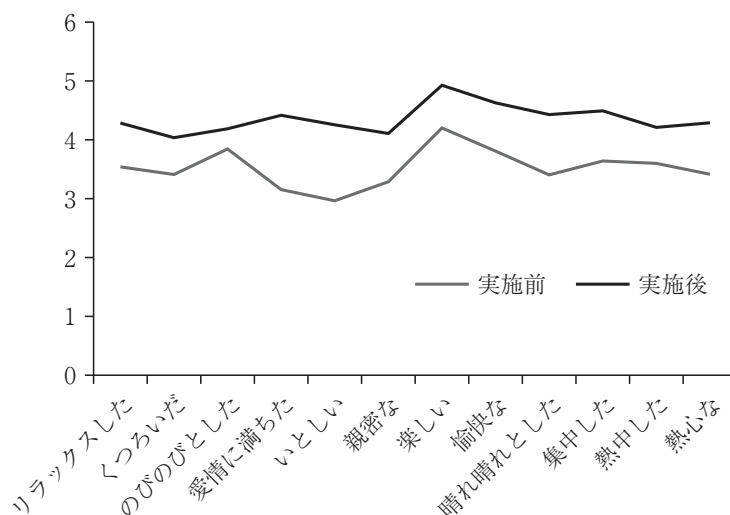


図1 高校生全体の気分変化（活動前後）

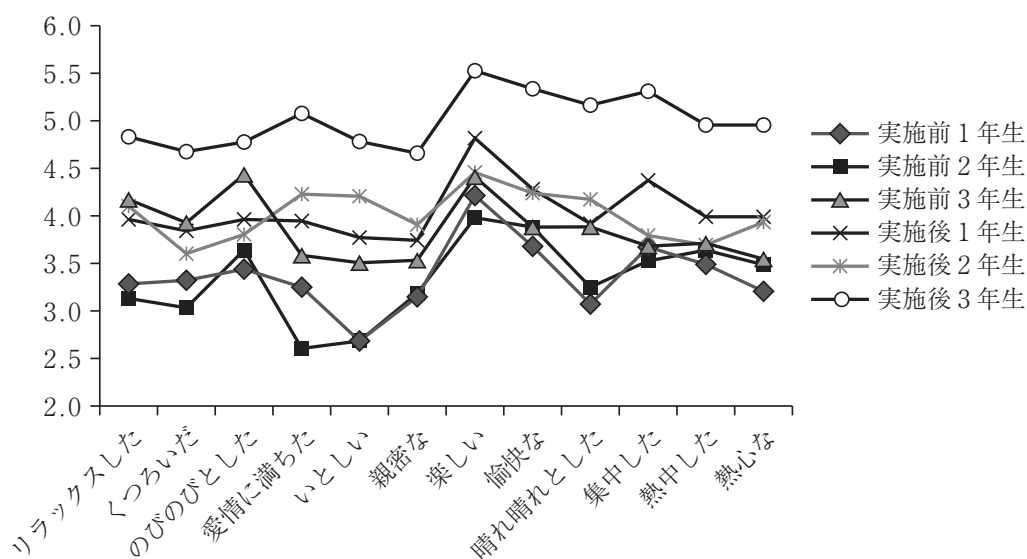


図2 学年別の気分変化 (活動前後)

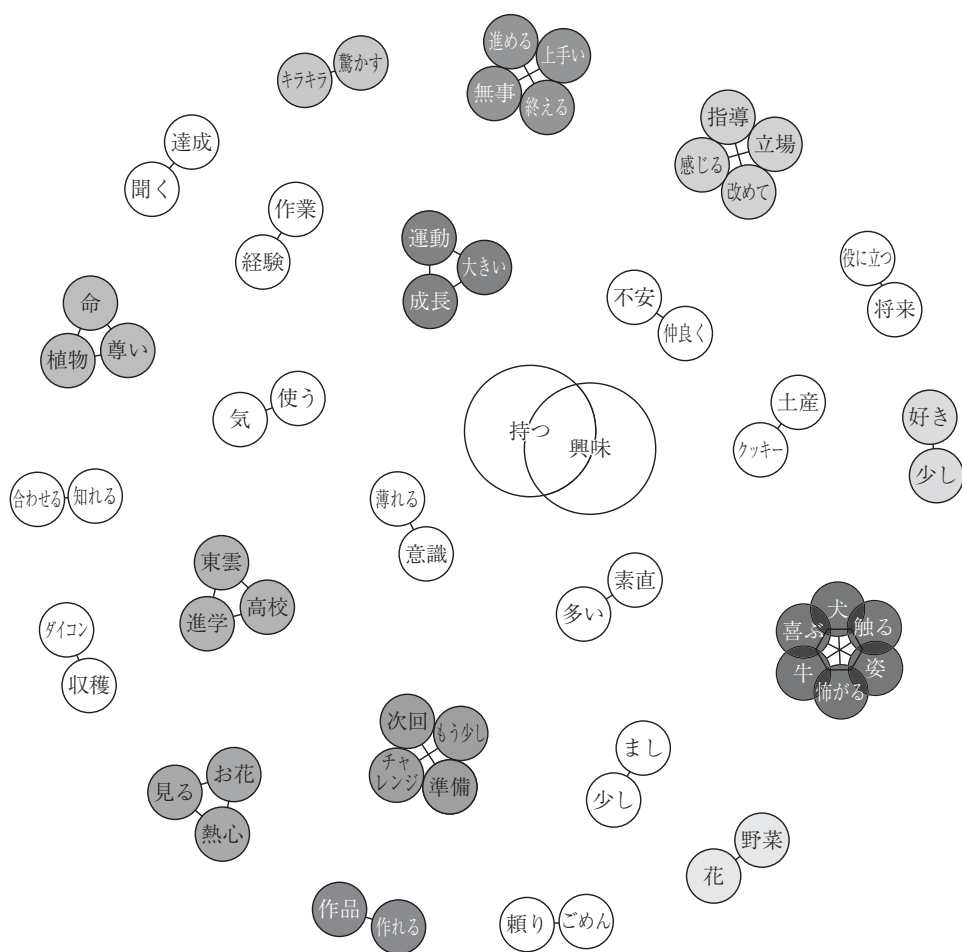


図3 KHコードによる分析

高校生の感想をテキストマイニング（KHコーダ）によって分析した結果を図3に示した。記述内容からは、「命」、「尊い」や「喜ぶ」、「好き」などの前向きな言葉が読み取れた。また、中心に記載されている「興味」、「持つ」という言葉は、園児に対して、自身が興味を持てたことや、園児に農業に対して興味を持ってほしいという願いからの言葉であると推察できる。また、それぞれのグループにおける名詞も数多く出現し、参加した高校生が多くの感想を記入したことも、活動自体が楽しく、思い出に残るものであったということが考えられる。



ふり返りとランチタイム



またあそぼうね

5 まとめ

兵庫県立篠山東雲高等学校地域農業科生徒と幼児（篠山市立たき幼稚園と津田このみ保育園の5歳児）とのプログラムを実施した。

農業高校生の自尊感情と有用感を、プログラムを通して検討した。

PMSの結果から、すべての項目において実施前よりも実施後に高い数値を示した。特に農業実習活動を深く学んできた3年生は、園児に教えることで肯定的な気分が向上した。

全体的にみて、幼児に高校生自身の学びを教えるという体験は、肯定的な気分を向上または醸成することが可能であるということがわかった。

生徒にとって授業は受身であることが多い。しかし、園児に農業の大切さを教えるという学

習活動は、より積極的に対峙しなければその活性化は難しい。生徒らは事前準備を整え、自分の役割を確認し、率先して園児の様子を敏感にうかがい、恐怖心を取り払い、興味を引き出した。また、園児の質問・疑問や欲求に答えることで、園児から接し方を学ぶという相互作用を生み出していた。体験を通して教えるという学習活動は⁵⁾、⁶⁾ 幼児を理解することと、次世代を育成する立場として、幼児の手本として行動する自覚を生徒に促す機会として意義があるといえる。

6 おわりに・将来への展望

篠山東雲高校での学びを通して、自尊感情を高め、積極的にボランティア活動に足を運び、研究発表を人前で堂々とできるところまで高めるために、実習活動やさまざまな体験活動を通じた農業高校ならではの多様な教育の実践をさらに果たしていきたい。少人数を活かしたきめ細やかな指導や、多世代との交流や地域とのふれあいの中で、生徒たちがたくさんのことを学び、たくましくなり、自分の言葉で自分の意見を堂々と話し、その場に応じた適切な行動がとれるように成長する教育の実践が望まれるところである。

一方、幼児期の体験は運動能力や体力、健康面において肯定的に捉え、自然への理解が深いと報告がある。望ましい生活習慣を身に付け、好奇心、判断力、自己主張が見られ、集中力や観察力、学習能力や学習意欲、人間関係やコミュニケーション能力についても同様に豊かな自然体験活動の経験と深い関連性があることが報告されている。⁷⁾

今回の試みは双方にとって貴重な経験であった。それは、生徒それぞれが安心して居ることができる居場所があり、存在に期待されている安定した場所であることを幼児は体感した。高校生と園児はほぼ1対1の密接な関係で活動することができた。畑に行ってひいて持ち帰った大根を見失った園児に、保育士があらかじめ抜いておいたものを渡そうとしたが、園児は「自分のものではない」と主張した。一般的な保育の場面では、保育士が「また遠くの畑まで行かないといけない」、「あなたの抜いたものと同じだから」、「勘違いしたただけだから」、「時間の余裕がない」というようなおとなの論理で子どもを納得させる場面が想像できるが、その時、子どもの気持ちが良く理解できた高校生は幼児と手をつない



こだわりの大根

で再び畑に行き、子どもが納得する方法で好みの大根を抜かせてくれた。保育者は「幼児一人一人の特性に応じた教育・保育の充実・幼児期の教育の質の向上を図る」ともちろん理解しているが、高校生の寄り添う姿は目の覚める思いであったと話していた。高校生の安定感を感じたために、園児は自分の思いを伝えることができたのではないかと感じた。また、昼食時にはグラウンドのテントの中、和やかな雰囲気では話が弾み食欲を増した様子がみられた。

篠山東雲高校の名前の由来となっている「東雲」という地名(移転前の高校のあった場所)は、結核病院があり、有効な治療法がなかった当時には多くの方々が最後の時を過ごされた場所である。東雲という地名から、命が終わった場所から新しい命へと引き継がれていくことを感じた場所であった。

先生方はじめ多くの方々にご協力をいただき、高校生の肯定的気分や有用感を増加または醸成することのできるプログラムを実施することができた。当日、カメラマンに徹し、高校生と園児を温かいまなざしで撮影してくださいました地元のOさん、Kさんに深く感謝いたします。

参考文献・資料

- 1) 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」—子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する—
(平成22年10月14日国立青少年教育振興機構)
- 2) 文部科学省中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」(2013平成25年1月答申の14)
- 3) 平成26年版 子ども・若者白書(全体版) 第2節 体験活動
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_02.html
- 4) 福井 至 Positive Mood Scale (PMS) の開発 [東京家政大学研究紀要 第44集(1)、2004、pp.227~233]
- 5) 小清水貴子 高校生が幼児に教える活動を取り入れた保育体験学習 2010年
長崎大学教育学部紀要. 教科教育学, vol.50, pp.75-86; 2010 2010-03-01
http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/23282/1/kyoukakyouiku50_075.pdf
- 6) 文部科学省 体験活動事例集—体験のスヌー I. 1体験活動の教育的意義
[平成17、18年度 豊かな体験活動推進事業より] 平成20年1月
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm
- 7) 山本裕之、平野吉直、内田幸一 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究
国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要、第5号、2005年
<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/5/File/kiyo507.pdf>

参考資料

ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）

基本理念として、兵庫の教育において培うべき力等として以下のような項目を掲げ、さらに教育施策の重点目標を示している。

- 心身ともに健康で、幅広い知識や教養を身に付け、豊かな情操や道徳心、命や自然を大切にする態度を養うとともに、望ましい勤労観や職業観をはぐくみ、生涯にわたって個性や資質能力を磨き、志をもって自らの未来を切り拓く力を培うこと。
- 思いやりや寛容の心をもって多様な人々と共生する態度を養うとともに、地域の課題の解決に参画するなど、震災の教訓を踏まえ、地域の人々と手を携えながらふるさと兵庫の発展に貢献する力を培うこと。
- 一人一人が社会を構成する一員としての責任を自覚し、公共の精神や人権尊重の精神に基づき、よりよい社会づくりに向けて主体的に行動する力を培うこと。
- 伝統や文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、他国を尊重する態度を養うとともに、幅広い知識や教養、柔軟な思考力に基づく判断力や創造力、コミュニケーション能力を培い、国際社会の平和や発展に貢献する力を培うこと。

基本理念のための教育施策の重点目標

1 自立的に生きる力を培い、創造性を伸ばす教育に取り組みます

【めざすべき方向】

- 幼児期の教育をはじめとし、公・私立学校ともに、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」など「生きる力」をはぐくむ。
- 情報教育や国際化に対応した教育など、今日的な課題に対応した教育を推進するとともに、学力向上方策の充実を図り、「確かな学力」の確立に取り組む。
- 道徳教育を充実し、人間形成の基盤となる道徳性など「豊かな心」の育成に取り組むとともに、国や郷土の伝統と文化に親しみ、歴史・文化の理解を深める教育を推進する。
- 体育・スポーツ活動や健康教育、食育を推進し、「健やかな体」の育成に取り組む。
- 職業教育・キャリア教育を通して、望ましい勤労観・職業観の育成に取り組む。
- 生徒の多様な学習ニーズに対応する県立高等学校教育改革を推進する。
- ひょうごユニバーサル社会づくりの理念に基づく特別支援教育の充実に取り組む。
- 建学の精神に基づく独自の教育理念のもと、特色ある教育を行う私学教育の振興に取り組む。

2 「体験教育」をはじめ兵庫の特色ある教育を推進します

【めざすべき方向】

- 子どもたちの発達段階に応じた体系的な体験活動が行われるよう、兵庫型「体験教育」を推進する。
- 自らの命を守る安全教育に加えて、助け合いやボランティア精神など「共助」の精神を培うよう、震災の教訓を生かし語り継ぐ兵庫の防災教育を推進する。
- 人権という普遍的文化の構築をめざし、人権尊重の理念に基づく「共生」の心の育成に取り組む。
- いじめ・不登校等に悩む子どもや保護者の悩み等に適切に対応するため、子どもたちの「心」を支えるシステムの充実に取り組む。

3 子どもたちの学びを支えるため、学校・家庭・地域が一体となって取り組みます

【めざすべき方向】

- さまざまな教育活動を通して、地域の教育力の向上に取り組む。

- 地域で子育てを支える環境づくりや安心して子育てができる環境づくりなど、教育の原点である家庭の教育力の向上に取り組む。

4 子どもたちが安心して学べる環境づくり、信頼される学校づくりを進めます

【めざすべき方向】

- 教職員の協働体制を確立し、学校の組織力の向上に取り組む。
- 研修や免許更新制度の実施を通して教職員の資質の向上を図るとともに、メンタルヘルスの保持・増進等を通じた、教職員の健康管理を図る。
- 学校評価等を通じて、「開かれた学校づくり」を推進する。
- 教育の機会均等を確保するため、修学支援の充実などに取り組むとともに、通学路等における安全確保や県立学校施設の耐震化や、安全・安心で質の高い学習環境を整備する。
- 教育委員会評価の実施や移動教育委員会等の開催を通じ教育委員会機能の充実に取り組む。

5 新しい時代を担う人材育成や高度な研究を充実し、地域とともに歩む高等教育を推進します

【めざすべき方向】

- 県立大学において教育、研究、社会貢献の各分野に積極的に取り組み、自律的かつ効率的な大学運営を行う。
- 教育分野では、地域や国際社会で活躍できる創造性と自立性を有する人材の育成に取り組む。
- 研究分野では、先進的・独創的な研究や地域の課題に対応した研究を展開する。
- 社会貢献分野では、地域とともに発展する大学として生涯学習、産学連携、国際交流等を積極的に展開する。
- 県内外大学の連携・交流を推進し、それぞれの大学の特色を生かした教育・研究の推進、地域産業や地方自治体との連携による地域社会の活性化を推進する。

6 県民だれもが生きがいをもって地域社会に参画する生涯学習社会づくりを推進します

【めざすべき方向】

- 県民一人一人が、生きがいを見いだしたり、学習成果を地域社会の課題解決に生かせるよう、県民の学習ニーズに応える社会教育・生涯学習の振興に取り組む。
- 県民だれもがそれぞれの年齢や体力に応じて、「いつでも、どこでも、気軽に」スポーツに参加できるように、のじぎく兵庫国体やのじぎく兵庫大会の成果を生かしたスポーツの振興に取り組む。